

2010年4月

## 「コリーク」43号 目次

巻頭言 (1~2) 戦略的研究プロジェクト (3~5) 第37回研究員集会報告 (5)  
第4回日中高等教育フォーラムに関する報告 (6) 大学教授職 (Changing Academic Profession [CAP]) に関する国際会議報告 (6~7) 高等教育公開セミナー報告 (7) 特別研究報告 (7~8) 2009年度の公開研究会 (8~9) センター往来 (9) 新任者・離任者から一言 (10~14) センター滞在記 (15~16)

## 巻頭言



### Familiarity Breeds Surprise

Keith Morgan

(Visiting Professor, RIHE, Hiroshima University)

Familiarity breeds surprise! It is not just in the financial world that familiarity is a necessary prerequisite for surprise. For a visitor returning to the University in January, the surprises were tangible. Did the new directional name-boards intend to echo the graveyard? Could it be that they really did indicate the end of the buildings shrouded in phantom grey cloth? Surely even the increased costs of efficiency could not have proceeded to this extent. Perhaps the coverings were indeed part of the efficiency itself — to protect the buildings from winter's icy blast and reduce the heating bill without diminishing academic productivity. Even better, perhaps the cover was merely the canvas on which the artistic talents of academics could provide a corporate display and entice even more brilliant students to the University. Alas no! It is merely the precursor to repairing the natural decay of fifteen years' exposure to the rigours of our climate.

In the academic world, fifteen years seem no more than a flicker. I recall temporary buildings at the university that first employed me that had lasted for about fifty years with no more than an occasional coat of paint; but perhaps permanent buildings merit far better care.

The Institute moved to its present permanent home just fifteen years ago. By chance, I was the first academic to take up residence here in April, 1995. The librarian, members of the office staff and I were supplied with an apparently inexhaustible stream of packed cardboard boxes (an essential component of celebrating the arrival of spring in Japan). In this instance, the boxes originated in Hiroshima and contained the library and possessions of RIHE.

Moving the Institute from the old campus in Hiroshima was, in effect, a metamorphosis — necessary to enable the fully developed organism to emerge from its chrysalis. In its previous existence of almost a quarter of a century, it

No. **43**

had grown rapidly and successfully. It had fulfilled the expectations of its foundation, and more than filled the space extracted from the neighbouring Central library. The Institute's own library had become accessible to slim readers only: it filled the corridor, every wall-space, and all offices. On a visit to the old Centre, space for me to sit, kindly made available by Professor Otsuka, was created only by moving piles of books from the chair — a procedure that Professor Arimoto took with him to his new office.

The spacious new campus at Saijo was rather like discovery of a new world: more American than National University. More offices than people, corridors with no books — though not without cardboard boxes, rooms for graduate students as well as professors; and outside space for throwing baseballs, tennis and barbeques. Yet outside there was also the residue of a building site. Roads were merely deeply rutted tracks — transformed by rain into ankle-deep, yellow mud; cafeteria food and drink remote and the Coop shop even further distant. The surrounding jungle contained warnings to beware of the snakes; the resident pack of dogs, tolerated engineers, but found a need to resist education: their rejection of higher education focussed on Professor Yamanoi who fought nobly on behalf of progress and humanity.

In its new centre, the Institute flourished. The space provide room to expand; the move triggered enthusiasm; and the coincidence of timing presented opportunities for engagement in the dramatic developments taking place in higher education at that time. So perhaps when the grey shrouds vanish with the spring this year there will be a similar occasion to identify the newly revealed RIHE as ready, well provided to respond energetically, now with much new talent as well as accumulated wisdom, to the great challenges that higher education needs to address nationally and internationally.



センター建物今昔（左：1995年当時，右：現在）

\*\*\*\*\*

#### ■ Profile ■

Keith Morgan was educated at Manchester Grammar School and Brasenose College, Oxford. He obtained a 1<sup>st</sup> class degree in chemistry and completed a doctorate there in 1955. After a period as senior research fellow in the UK Civil Service he moved to Birmingham University as ICI research fellow and lecturer (1957) and then to Lancaster University (1964). His research lay in three main areas: heterocyclic chemistry, spectroscopy and structure reactivity correlation. He worked in the US (1960-61) with H.C. Brown at Purdue University and was visiting professor for a number of years at University of Alexandria Egypt and at University of Canterbury NZ.

At Lancaster he was appointed Pro-Vice-Chancellor (Deputy VC) from 1973 to 1986. In 1986 he moved to Australia as Vice-Chancellor, University of Newcastle. On retirement in 1993 he was invited to Japan, as professor at The University of Electro-Communications and in 1995 to RIHE, Hiroshima University. He has worked at RIHE for varying periods every year since 1995. In 2003 he was visiting professor at Nagoya University. His research has been mainly directed to studies of the economics of higher education and the interface between universities and government.

He has an honorary degree from University of Newcastle and is Professor Emeritus at University of Newcastle and Lancaster University.

## 戦略的研究プロジェクト

### ◆◆◆ 2009年度活動を振り返って ◆◆◆

プロジェクトリーダー：山本 眞一  
(高等教育研究開発センター長)

2008年度から当センターの組織的研究活動の最重要な柱として、「21世紀知識基盤社会における大学・大学院改革の具体的方策に関する研究」を位置づけ、5年計画で実施中です。この研究は、文部科学省特別研究経費（戦略的研究推進経費）を得て行うもので、わが国の大学・大学院を21世紀知識基盤社会にふさわしい形に改め、地域や世界に貢献する高度な能力を備えた人材を養成しうる高等教育システムを構築するため、「経済財政改革の基本方針2007」（2007年骨太の方針）を踏まえ、大学・大学院改革のための具体策に関する研究を行うことを目的とするものです。我々は、この研究を「戦略的研究プロジェクト」と略称し、研究員の皆さんを始め、多くの方々のご支援を得つつ、活動を進めてまいりました。

2008年度に大学院問題の解明からスタートし、現在では研究計画に沿って、①世界トップレベルの大学院教育の改革、②知識基盤社会における人材養成と教育の質保証、③高等教育の国際化・多様化と機能・役割分担、の3つの観点を視野に収めつつ、大学院教育の改革問題の解明をさらに深化させてまいりました。このため、大学院の現状や課題を主として国際比較の観点を中心におこなう「比較研究班」と、わが国の大学院の現状を各種のデータによって検討・検証する「実証研究班」に分けて研究活動を継続中です。それぞれの班の活動については、福留准教授、島准教授の報告をご参照ください。

2009年11月19日から3日間、「知識基盤社会における人材養成と教育の質保証」と題して、国際ワークショップと研究員集会を開催しました。3人の海外からの招へい者を含む5人の講演者から有益なお話を伺い、また活発な意見交換が行われました。3人の海外招へい者は、オーストラリア・メルボルン大学のサイモン・マージンソン教授、欧州大学協会（EUA）事務局長のレスリー・ウィルソン博士、中国北京大学教育学院の陳向明教授で、これに基調講演をお願いした東京大学の平澤冷名誉教授、特別講演をお願いした元東京工業大学長の相澤益男総合科学技術会議議員で、いずれもが大学院が各国の高度な人材養成に寄与すべきことを力説されておりました。また、これらの議論は、毎年定期的に開催している研究員集会にも引き継がれました。

2009年度の研究活動を総括して、2010年3月13日、東京都内で成果報告会を実施いたしました。基調講演に元総合科学技術会議議員で東北大学大学院工学研究科の原山優子教授から「人材養成機関としての大学・大学院の存在意義」と題する講演が行われ、先生の豊富な経験と鋭い分析から得られたお話を聴きました。また比較研究班、実証研究班の研究成果をそれぞれのセッションに分けて行い、前者は「海外大学院の比較研究—世界における変革と日本への示唆—」、後者は「日本の大学院の変容と今後の課題—マクロ・ミドル・ミクロレベルから—」と題して、担当する教員が報告を行いました。質疑の時間に、フロアからこの2つの班の研究の相互関係や全体の研究テーマとの関連づけを強化すべきとの発言があり、このことは当戦略的研究プロジェクトをより活発化させるための大きな課題として受け止め、今後の研究活動の充実につなげていきたいものだと考えております。

いずれにせよ、現在、高等教育システムは大きな転換点にあります。その転換点を象徴するキーワードは、グローバル化、知識基盤社会、18歳人口の減少などであり、それらに向けて、大学院の充実、質保証、国際競争力の確保、大学経営力の強化、教育や研究モードの転換、雇用と教育との整合性などの対策があり、そのためにも大学院レベルでの人材養成の問題は避けて通れません。同時に、高等教育研究それ自身も転換点にあると私は見ております。「基礎的な知見の上に現実を解明し、将来を見通すこと」これこそが高等教育研究に期待されていることであり、また我々の役割ではないかと考えております。

戦略的研究プロジェクトは、いよいよ計画期間の半ばに入ろうとしております。研究員の皆さんには、これまで以上にご支援のほど賜りますよう、お願いいたします。



## ◆◆◆ 比較研究班報告 ◆◆◆

福留 東士

(高等教育研究開発センター准教授)

比較研究班では現在、「大学院改革」および「学士課程教育を中心とする人材養成と教育の質保証」を2つの柱として研究を進めています。中でもこれまでの2年間、最も中核的なテーマとして大学院改革を位置付けてきました。

日本の大学院の拡大には社会的ニーズよりも供給側の要因が強と言われてきましたが、ここに来て高度な能力を持った人材を養成する機関として大学院の重要性が高まりつつあるのではないのでしょうか。比較研究班ではこのような問題意識に立ち、知識基盤社会に貢献する知的人材を幅広く育成する教育機関として各国の大学院がどのような現状にあり、政策レベル・機関レベルでどのような取組みが進められているのかについて検討を行っています。

主な対象国と担当スタッフは、イギリス(秦)、フランス(大場)、中国(黄、李)、アメリカ(渡邊、福留)ですが、専任スタッフがカバーできない国・地域やテーマを対象に、国内外から専門家を招聘し、研究会を開催して重要な知見を提供いただいています。

世界的視野に立って大学院の現状を見ると、大学院の先進国としてのアメリカ、ボローニャプロセスを推進する中で大学院段階の教育が顕在化・拡大しつつあるヨーロッパ、国家の強力な政策を背景に国際競争力を高めつつあるアジアという三極構造として理解することができるだろうと思います。ただし、国ごとの文脈は実は多様ですし、また他国追従的な大学院拡大やいたずらな学歴の高度化に対しては批判の目を向けることも大切でしょう。このような複雑な現象に対してどのような視角を持ってアプローチするのが我々にとって重要な課題であると認識しています。

大学院に関する国際比較研究としては、バートン・クラーク博士を中心に主要5カ国の研究者を集めて1980年代に行われた研究や、最近ではワシントン大学の大学院教育研究センター(マレシ・ネラドセンター長)を中心に進められている研究があります。我々研究グループはこれら研究成果を踏まえつつ、独自の視点からなる研究を展開できるよう努力しています。最終的には、複眼的な視野を持って日本の大学院の現状に対して示唆を与えることが目標です。日本では、ここ数年の間に各大学で大学院教育の改革が進みつつあり、これまで教育機関としての位置付けが十分でなかった分だけ、いわば未知の可能性を持った教育領域であるといえるのかもしれませんが、我々の研究はまだ道半ばですが、その発展に寄与することができれば最大の喜びです。今後ともコリーグの皆様にご協力いただきながら、研究を進めていきたいと思っております。研究成果にぜひご期待下さい。

## ◆◆◆ 実証研究班報告 ◆◆◆

島 一則

(高等教育研究開発センター准教授)

2008年度より戦略プロジェクトとして、「世界トップレベルの大学院教育の改革」をテーマに研究が開始されました。実証研究班は、日本における大学院の拡大の中で、世界トップレベルの大学院(暫定的に旧帝大等を想定)がどのような拡大を経験し、現在どのような教育・研究環境におかれているのかを明らかにすることを目的としています。具体的には、①マクロレベルでみた大学院の拡大実態(大膳)、②ミドル(機関)レベルでみた大学院の拡大状況(小方・村澤)、③ミクロレベルでみた大学院の教育・研究環境(島・安部)について研究を進めてきました。その成果については「大学院の国際的動向と我が国の現状・課題」(2009年3月14日)において報告を行いました。そこでは、①マクロレベルについて『学校基本調査』の大学院在籍者数にもとづき、a. 大学院が1990年代以降急拡大したのち、2000年より停滞(もしくは減少)していること、b. 修士課程の拡大については、社会科学・その他・工学・保健分野、博士課程では保健分野・その他による拡大が大きいことを明らかにしました。②ミドルレベルに関しては学位授与数のデータを用いて、博士ではa. 学位授与機関数としては少数学位授与機関(9未満)の数が1995年から2005年にかけて増加するが、学位授与数については大量学位授与機関(300以上)によるシェアが増加していること、b. 大学類型別に見た学位輩出シェアは、旧帝大でやや減少していること、c. 修士についても、旧帝大のシェアが低下していることを明らかにしました。③ミクロレベルでは『教育指標の国際比較』の時系列データを用いて、日本の大学院の拡大状況を国際比較の観点から検討したうえで、日米両国で教育経験を有するリーディングスカラーにインタビュー調査をおこなった

(物理学分野に注目した)。結果として、a. 日本の大学院の拡大が西欧先進諸国と比較して遅れる一方で、物理学専攻に注目すると、リーディング大学のST比が日本において高くなっている(リーディング大学に大学院生が集中している)こと、b. 教員と大学院生の関係性について、米国においてRAという“雇用的”関係により、学生と教員の関係がより密接・積極的になっている可能性があるといった点について報告を行いました。

2009年度は、上記の3レベルにおいて、大学院のインプット(院生の入学)・スループット(院生の教育・研究条件)・アウトプット(院生の就職)について、より詳細なデータの収集と分析をすすめてきました。また、「知識基盤社会における人材養成と教育の質保証」というテーマについても研究に着手し、「教育知と仕事知の連関構造」について2010年度に大規模アンケート調査を実施するための準備作業を行っています。以上の様に日本における大学院の拡大と現状について明らかにしてきましたが、今後はリーディング大学院での「知識基盤社会における人材育成」という第二テーマとの発展的融合を目指していきたいと考えています。コリーグの皆様には引き続き、これらの研究の更なる進展に向けてのご協力・ご指導のほど何とぞよろしくお願いいたします。

## 第37回研究員集会報告

### 「知識基盤社会における人材養成と教育の質保証」

秦 由美子

(高等教育研究開発センター准教授)

第37回研究員集会は、平成21年11月20日の金曜日の午後から翌日21日の土曜日の午後にわたり、広島大学の学士会館2階・レセプションホールにて開催された。

本研究員集会では、企業、文科省、大学人の3つの視点から、「知識基盤社会における人材養成と教育の質保証」について発表をいただくことで、大学に対する三者の立場の違いが先鋭化されることになった。

セッション1の最初の基調講演者は金子元久氏(東京大学)に、また、二番目の基調講演者は有信睦弘氏(株式会社東芝顧問、中教審大学分科会委員)に、セッション2では、報告1を榎本剛氏(文部科学省高等教育局企画官・高等教育政策室長)、報告2を山崎宏之氏(独立行政法人産業技術総合研究所産学官連携推進部門・産学官連携コーディネータ)、報告3を本センターの島一則氏(広島大学)にお願いすることになった。セッション3では、セッション1とセッション2を受けて、加藤毅氏(筑波大学)のコメントを頂き、活発なディスカッションが行われた。

最初の演者である大学人の金子氏と第二の演者の企業人の有信氏が、くしくも共通のキーワードとして「モノ」を挙げた。金子氏は「モノに体化された知識」、有信氏は「モノを基盤とした新たな価値を持つコト、あるいはサービス」である。また、有信氏は大学院では研究者養成に傾斜しているため、実践的な教育にシフトしてはどうかという提言をしたが、これは金子氏の述べたところの学術領域と職業のレリバンスの問い直しに通じるものである。企業家の有信氏と山崎氏双方が共通して高等教育機関に求めた人材とは、「基礎的な知識を土台とし、グローバルな視点を持ち、学んだ知識を現場に有効に活用していく能力のある人材」である。また、加藤氏のコメントは、聞くものの心に多くの示唆や共感や反省、あるいは対立意見を産み出すほどの大きな影響を持つものであり、そういう意味でも本研究員集会は重要な成果をあげたと考えられるのである。

金子氏が述べたように、「職業分類の曖昧さ、専門職の定義の曖昧さ、質的保証の曖昧さ、大学と職業において必要な知識の定義の曖昧さ」といった混沌とした曖昧さの中で、さらには、山本センター長が揚げた過去の事例によれば、15年ごとに社会が求める枠組みは変化するという変動する社会の中で求められる人間とは、また、自ら充足しながら生きることのできる人間とはどのような人間なのか。長期的観点から次世代の、そしてその次の世代の学生の教育を支援する基本的枠組みが必要であり、そのためにも企業や大学、そして国民からの協力が求められる。



## 第4回日中高等教育フォーラムに関する報告

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

日本高等教育学会と中国高等教育学会高等教育学専業委員会との共催により、第4回日中高等教育フォーラムは2009年11月29～30日に東京大学にて開催された。今回のフォーラムでは、「高等教育の質保証と改善」という題目に基づいて「大衆化・ユニバーサル化時代の入学者選抜」、「大学における教育と学習行動」、「大学教育の改革と大学組織・構成員」、「国際化と質保証」という4つのセッションに分かれて、日本側から6名の報告者と中国側の13名の報告者がそれぞれ講演を行った。そのほか、司会や、コメント、一般参加者の約60名余が参加した。

第一セッションで中国側の代表者は、中国の高等教育大衆化と入学者選抜、中国少数民族の進学機会の階層間格差、中国の規模拡大と高等教育の進学機会の平等化について報告した。日本側の代表者は学力、所得、リスクという視点からユニバーサル化時代における日本の大学進学者の構造について講演を行った。第二セッションでは、中国側の代表者は、大学教育における「1年生」と「4年生」の教育、知識基盤社会における大学院教育、中国の高等教育拡大と専門分野の構造的変化、学士課程教育の米中比較に焦点をあてて口頭発表をした。日本側の代表者は学生からみた学士課程教育の深さと広さについて講演を行った。第三セッションでは、中国側の代表者は大学の発展と学長のリーダーシップの役割、高等教育機関における教育と研究の関係の変遷、中国における学術体制の構築の歴史的経緯に絞り込んで講演した。日本側の代表者は管理運営に対する教員意識の日中比較という視点から報告を行った。第四セッションでは、中国側の代表者は高等教育国際化に関する基本方針、中国の大学教員の質とその向上のための施策、中国の高等教育の不可避の課題について報告した。これに対して、日本側の代表者は中日韓比較の観点からグローバル化時代における留学生政策とその実践、学生・教員の移動・交流という視点から日本の大学の国際化と質の構造について検討した。

今回のフォーラムでは、ほとんどの報告者は日本語版と中国版の論文や、論文要旨、PPTなどを事前に用意し、また各セッションにおける日中双方の司会とコメント担当者もそのセッションの口頭発表に対して、質問したり、コメントしたりした。これにより、活発な討論が行われ、実り多い会であったと考えられる。



## 大学教授職 (Changing Academic Profession [CAP]) に関する国際会議報告

### 「国際的および実証的視点からみた大学教授職の変容 — 教育・研究活動に焦点を当てて —」

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2010年1月13日から14日にかけて、広島大学高等教育研究開発センター、文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」(研究代表者：有本 章)主催、比治山大学高等教育研究所共催により、アメリカ、イタリア、韓国、中国、ドイツ、マレーシア、南アフリカ、メキシコおよび日本国内から約60人の研究者と参加者が出席し、「国際的および実証的視点からみた大学教授職の変容—教育・研究活動に焦点を当てて—」を題目とする大学教授職に関する第4回目の国際会議を開催した。

この会議では、3つの基調講演と8つのカントリー・レポートが行われた。これらの報告では、国際比較、実証的視点に基づいて関係諸国における大学教授職の現状や変化に関して幅広い視点、また多様なレベルにおいて考察された。例えば、基調講演において、有本教授は歴史的、比較的な視点から大学教授職の研究と教育の関係に関する変化を捉える一方で、知識基盤社会においてフンボルト理念に基づいて研究と教育、および学習の統合の必要性を訴えた。カミングス教授は国際・比較的な視点から、アメ

リカ、日本、韓国、オーストラリア、および香港の事例研究を取り上げ、国際統計資料とCAP調査の結果を用いて、こうした国と地域における学術生産性の相違点に影響を与えた重要だと思われる要因を分析した。イタリアのロスタン教授と南アフリカのヒッグス教授は特にシステムレベルにおいて自国の高等教育改革と大学教授職の変化との関係について議論した。前者は欧州大陸の主要諸国と比較しながら、CAP調査に関するデータを示した上で、ボローニャプロセスの進展に伴って、イタリアにおける高等教育改革が大学教授職にもたらした問題点および危機を指摘した。後者は南アフリカにおける高等教育転換によって大学教授職に及ぼしたインパクトを分析し、今後の課題および改善すべき点を強調した。

一方で、多くの報告者が設定された会議のテーマに即し、システムではなく、より具体的な下位群(sub-group)という切り口から自国の大学教授職についてカントリー・レポートを発表した。

大会報告のほか、会議参加者は大学教授職のモデルやグローバル化時代における大学教授職が従事する教育活動と研究活動の関係などについて活発な討論を行った。

## 高等教育公開セミナー報告

### 平成21年度高等教育公開セミナー「大学教育の質保証」

主として大学教職員向けに例年開催している高等教育公開セミナーを、平成21年度は8月27日(木)から28日(金)にかけてセンター内で開催した。今回は「大学教育の質保証」と題して、センター教員9名によって講義を行った。セミナーへは定員(30名)を大幅に上回る43件の参加申込があったが、例年直前のキャンセルが見られることや1日のみの参加者も含まれることに鑑みて、全員を受け入れた。

セミナーの内容は以下の通りである(各講義1時間10分)。1日目(講義1~4)は基礎的事項や重要課題、2日目(講義5~9)は国際的動向をそれぞれ取り上げた。

講義1 大学システムの機能と構造(島一則)

講義2 教育・学習の質保証(小方直幸)

講義3 教育の質評価と大学経営~教職員の新たな役割(山本眞一)

講義4 入学者追跡調査

—入学者選抜資料データと在学中の成績・卒業後の進路との関係について—(大膳司)

講義5 大学教育の質保証の国際的な動向(黄福涛)

講義6 アメリカにおける大学教育の質保証(福留東土)

講義7 欧州における教育の質保証(大場淳)

講義8 高等教育政策の受容・波及:

ボローニャプロセスの欧州諸国への浸透状況を事例に(村澤昌崇)

講義9 イギリスの大学:一元化後の大学進学者の質の変化(秦由美子)

講義後のアンケート(匿名)では、質疑応答の時間がない又は足りない、内容が高度あるいは分かりにくい用語が多用されてるといった意見が目についた。特に質疑応答の時間不足は例年指摘を受ける事項であり、次回以降における講義内容の精選等が期待される。

(文責:大場淳)

## 特別研究報告

### 文部科学省委託調査報告

渡邊 聡

(高等教育研究開発センター准教授)

近年の高等教育を巡る激しい環境変化の中で、大学に期待される役割は増大かつ高度化の傾向があり、教員が行わなければならない業務は複雑多岐に亘っている。特にわが国の教員は、米国に比べて支援スタッフの数が少ない中で、本来業務である教育・研究だけでなく、大学の経営・管理運営に係る様々な業務を抱え込んでいる。さらにこれらの業務処理には煩雑な学内手続きやペーパーワークが多いため時間と手間を要する等、その設計自体に問題があることも少なくない。これらを要因として教員には多忙

感が増しつつあるが、問題解決のためには教員の勤務実態を把握するとともに、教員が果たすべき役割の再配分や大学における教育・研究を含む諸業務の処理体制の見直しが必要である。

高等教育研究開発センターでは、「大学院における教員の勤務実態に関する調査研究」と題する「平成21年度先導的の大学改革推進委託事業」（事業期間：平成21年8月～平成23年3月）を文部科学省より受注した。本調査研究は、①大学院担当教員の勤務実態、②教員と非教員スタッフの業務実施分担、③大学における教育・研究を含む諸業務の処理体制、を明らかにすることにより、知識社会の中で大学院教育と研究に注力すべき教員の業務実施の集中と効率化に資することを目的とするものである。

上記調査項目①～③の目的を果たすため、今年度の研究活動としてまず、当センター、比治山大学高等教育研究所および三菱総合研究所（再委託先）において過去に実施した調査研究を含め、先行する調査研究成果の整理と再分析をおこない、報告書として纏めたものを文部科学省に提出した。また、大学レベルでの具体的な問題点を把握することにより、広く大学に存在すると考えられる諸問題の構造化を図るため、第2の調査活動として国内10大学（香川大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、広島大学の国立5大学と金沢工業大学、慶應義塾大学、日本赤十字広島看護大学、武蔵野大学、立命館大学の私立5大学）および比較分析のために米国大学（カリフォルニア州立大学イーストベイ校、カリフォルニア大学バークレー校、コロンビア大学、ジョージタウン大学、ニューヨーク大学、ペンシルバニア大学、メリーランド大学カレッジパーク校）を訪問し、人文社会系・理工系・医歯薬系学部・研究科に所属する教員の聞き取り調査を実施した。

今年度の調査研究結果を踏まえ、平成22年度は構造化された諸問題の実態を更に解明するようアンケート調査票を設計し、人文社会系・理工系・医歯薬系大学院における教員の勤務実態や全体としての問題を幅広く分析可能とするようなアンケート調査を行う予定である。

## 2009年度の公開研究会

\*肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2009/5/11)	叶 林氏（東北大学 JSPS 外国人特別研究員／杭州師範大学教育科学学院准教授）	中国の博士課程の現状と問題点－質保証を目指して－
第2回 (5/11)	レイバーン・バートン氏（広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員／サウスカロライナ大学ビューフォート校政治学教授）	アメリカのアクレディテーションと高等教育の質保証
第3回 (7/1)	レイバーン・バートン氏（広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員／サウスカロライナ大学ビューフォート校政治学教授）	ラーニングアウトカム改善の手法
第4回 (8/17)	サイモン・マージンソン氏（広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員／オーストラリア・メルボルン大学教授）	高等教育における市場改革の限界
第5回 (9/7)	サエド・ベバンディ氏（パリ第8大学准教授／名古屋大学高等教育研究センター客員教員）	教授法に関する諸問題とフランスの大学
第6回 (9/11)	サイモン・マージンソン氏（広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員／オーストラリア・メルボルン大学教授）	アジア太平洋地域大学長の国際戦略
第7回 (10/9)	サイモン・マージンソン氏（広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員／オーストラリア・メルボルン大学教授）	外国人から見た日本の高等教育
第8回 (12/3)	張 応強氏（华中科技大学教育研究院院長／教授） 楊 武勳氏（国立暨南国際大学比較教育学科副教授）	中国と台湾における高等教育の質保証
第9回 (12/9)	杉本和弘氏（鹿児島大学教育センター准教授）	オーストラリアの高等教育質保証システム－歴史的展開と新たな動き－



	講 師	テ ー マ
第10回 (2010/1/5)	ルイズ・モーリー氏 (高等教育と公平性研究センター長/英国・サセックス大学教授)	高等教育欠如の社会学—ガーナとタンザニアにおける高等教育への参加拡大政策の考察—
第11回 (1/5)	木戸 裕氏 (国立国会図書館調査及び立法考査局専門調査員)	ヨーロッパの大学改革とドイツ高等教育の質保証
第12回 (1/7)	西山雄二氏 (東京大学特任講師/グローバルCOE 共生のための国際哲学教育センター)	高等教育制度における人文科学の形—ドキュメンタリー映画「哲学への権利—国際哲学コレージュの軌跡」をめぐって—
第13回 (2/8)	吉川裕美子氏 (大学評価・学位授与機構学位審査研究部教授)	ドイツにおける大学院水準の教育の展開
第14回 (3/25)	リチャード・ジェームズ氏 (メルボルン大学高等教育研究センター長)	オーストラリア高等教育における学習成果の測定—新たなパフォーマンス・ファンディングの構築と指標開発—

## センター往来 [2009年4月～2010年3月]

\*肩書は当時のもの(敬称略)

### 〈2009年〉

- 4月 Rayburn C. Barton (サウスカロライナ州立大学), 神代 浩 (文部科学省)
- 5月 叶 林 (杭州師範大学)
- 6月 **フルブライト国際教育交流プログラム** [Barbara A. Clark (ニューヨーク市立大学), Maria de los Angeles Crummett (南フロリダ大学), Ronald T. Lambert (ジョージ・ワシントン大学), Nancy G. McDuff (ジョージア大学), Ronald Pirog (トレド大学), Aimee E. Thostenson (セントキャサリン大学), 吉住 誠司・菅原 恵 (学術室国際企画連携グループ)]
- 7月 Simon William Marginson (メルボルン大学), 小原 一仁 (玉川大学), 大林 小織 (神戸大学), 小椋 壘 (神戸大学), 小坂 法美 (JICA 中国国際センター), 岡野 拓・柴田 里香 (ひろしま国際センター)
- 8月 なし
- 9月 サエド・ペバンディ (パリ第8大学)
- 10月 なし
- 11月 **国際ワークショップ及び第37回研究員集会招聘者** [Simon William Marginson (メルボルン大学), 平澤 洽 (東京大学名誉教授), Lesley Wilson (欧州大学協会), 陳 向明 (北京大学教育学院), 相澤 益男 (総合科学技術会議議員・前東京工業大学長), 金子 元久 (東京大学), 有信 睦弘 (株式会社東芝顧問・中教審大学分科会委員), 榎本 剛 (文部科学省), 山崎 宏之 (産業技術総合研究所), 市川 昭午 (国立大学財務経営センター), 加藤 毅 (筑波大学)]
- 12月 張 応強 (華中科技大学), 楊 武勳 (国立暨南国際大学), 杉本 和弘 (鹿児島大学), 久保 佐知・小林 庸至・山中 幸輝 (野村総合研究所)

### 〈2010年〉

- 1月 Louise Morley (サセックス大学), 木戸 裕 (国立国会図書館), 西山 雄二 (東京大学), Keith Morgan (ランカスター大学/ニューキャッスル大学名誉教授), **CAP 国際会議招聘者** [William Cummings (ジョージワシントン大学), Ulrich Teichler (カッセル大学), Martin Finkelstein (シートンホール大学), Jesús F. Galaz-Fontes (バハカリフォルニア自治大学), Michele Rostan (パヴィア大学), Philip Higgs (南アフリカ大学), Jung Cheol Shin (ソウル国立大学), Ahmad Nurulazam Md Zain (マレーシア科学大学), 有本 章・長谷川 祐介 (比治山大学), 江原 武一 (立命館大学), 木本 尚美 (県立広島大学)]
- 2月 吉川 裕美子 (大学評価・学位授与機構), Michelle Allan (オーストラリア大使館), 林 一夫 (文部科学省)
- 3月 Richard James (メルボルン大学)

## 新任者・離任者から一言

\*肩書きは2010年3月現在のもの（敬称略）

### 2010年度客員研究員



荒牧 草平（あらまき そうへい）  
群馬大学教育学部准教授

私は、これまで、高等教育進学機会や高校生の進路選択等に関する研究を行ってきました。高等教育に関連するテーマを扱ってきたとは言えると思いますが、高等教育自体の研究を行ったわけではありません。その私に一体いかなる貢献がなし得るのか、甚だ心許ないですが、周辺の関心に基づく発信が、高等教育研究に何かしら益することとなれば幸いです。

一方、私自身は大学教員でもありますので、このような形で高等教育研究の中心的機関に関わることができ、大変に有益なことだと思っています。皆さんから多くのことを学ばせて頂きたいと思えます。



上杉 道世（うえすぎ みちよ）  
元東京大学理事

私は文部科学省において様々な局課で大学行政を経験したのち、法人化半年前に東京大学事務局長となり、法人化後は理事（人事労務・事務組織担当）として、通算4年間勤務しました。そこでは優れた教育研究の展開とそれを支える経営の確立が課題であり、特に私の担当としてはマネジメントの改善と大学職員の力量の向上が急がれました。私はそのため人事、組織、業務をトータルに改善するプランを作成し、実行し、一定の前進は見たと思います。それとともに講演や原稿執筆の機会が増え、著書『大学職員は変わる』も刊行しました。今後とも各大学の向上のためにお役に立つことができれば幸いです。



大川 一毅（おおかわ かずき）  
岩手大学評価室准教授

岩手大学評価室専任教員として、法人評価や認証評価など、大学評価に関わる業務や調査研究をしております。このたびは、貴センター客員研究員にお加えいただき、心より御礼申し上げます。各位最先端の高等教育研究に学べますこと、この上なき喜びでございます。

一昨年、高等教育研究開発センター関係の皆様達と島根大学を訪問しました際に、愉快地語りましたことを覚えております。「教育学を選んだきっかけは？」という話題の中で、私は「校章」と答えましたが、その場にいらした方の反応は「？」でした。その後の話題が趣味にまで及び、私の趣味が「大学めぐり」であることがきっかけで、貴センターホームページに「全国校章大学めぐり」を寄稿させていただく次第と相成りました。どうぞよろしく願い申し上げます。



小原 一仁（おばら かずひと）  
玉川大学学術研究所助教

このたびは、貴センターの客員研究員となる機会をいただきましたこと、大変ありがたく存じております。

私の研究分野は、比較高等教育、大学経営リーダーシップ、K-16教育です。現在はとくに、リアルオプションアプローチを応用した大学経営政策における意思決定の数理モデル化を、金融工学分野の研究者との共同研究として行っております。

自身の高等教育をすべてアメリカで受けたため、日本の高等教育事情には未だ疎いところが多々ございます。他の先生方のご迷惑とならぬよう、さらなる研鑽に努めてまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



森 利枝 (もり りえ)

大学評価・学位授与機構  
学位審査研究部准教授

高等教育機関そのものや高等教育機関が与える資格の正統性を担保する仕組みに関心を持っ

ています。大学とは異なる手続きで大学と同じ機能（の一部）を果たそうとしている高等教育の機関に長く身を置いており、正しく「オルタナティブ」であるために「オーソドックス」がいかにあるかを考えるということが続けて参りました。そのため「大学はなぜそう振る舞うのか」という単純な問いをいつも抱えています。この度客員研究員にお加えいただいたことを身に余る光栄に存じ、同時に日頃の問いをさまざまな角度から問い直す好機とも存じております。どうかよろしくご指教ください。

### 2010年度学内研究員



児島 昌樹 (こじま まさき)

財務・総務室副理事

このたび、学内研究員を仰せつかりました。平成21年4月から総務企画担当副理事として広島大学に赴任して早1年が過ぎ

ようとしています。

22年度から第2期中期計画に入ります。今後は業務改善にも力を注ぎたいと考えております。教員が教育・研究・診療・社会貢献に専念するためにも、業務組織の見直しと業務改善を図り効率的な運営を行うと同時に、職員の人材育成を行うことが不可欠です。

このような中で、例えば、高等教育や国立大学法人運営に係る国の方向性や他大学の動向など皆様から多くを学ばせていただき、本学としての教育研究組織や適切な業務組織、人材育成・異動システムの構築を考えていきたいと思っています。どうぞよろしくご厚意申し上げます。



佐野(藤田)真理子(さの[ふじた]まりこ)

大学院総合科学研究科教授

私の専門は、文化人類学でアメリカ社会を対象として、文化的価値体系とライフステージの関係や、民族集団間関係の歴史・社会・文化的変遷を研究しています。高等教育関連領域では、2000年から本学の障害学生修学支援に関わっており、「高等教育のユニバーサルデザイン化」や、「アクセシビリティ」をキーワードとした支援システムの構築、教育プログラムや、人材育成プログラムの開発に携わっています。2008年から、初代アクセシビリティセンター長として、活動全般の企画・立案・運営を行っています。

これから2年間学内研究員としてお世話になりながら、多様化する学生層に対する高等教育と学生支援のあり方について研究を進めて行きたいと思っております。

これから2年間学内研究員としてお世話になりながら、多様化する学生層に対する高等教育と学生支援のあり方について研究を進めて行きたいと思っております。



三本木 至宏 (さんぼんぎ よしひろ)

大学院生物圏科学研究科准教授

このたび、学内研究員に就くことになりました。どうぞよろしくお厚意いたします。

私の専門は微生物学と蛋白質

科学です。研究室の博士研究員や学生(総勢10名)とともに研究を展開しています。同時に私は、教養教育委員会や人材育成推進室FD部会に所属しているため、全学の教育施策にいち早く触れることができます。

学内研究員への就任を契機に、研究現場における教育活動のあるべき姿を見つけないかと思っております。さらに、研究室という小集団の活動と全学レベルの教育施策との相互関係を明らかにしたいと考えております。

広島大学の組織文化を踏まえ、研究・教育事業とは何なのか、そしてそれらが誰のためのものなのかについて理解を深めます。



古澤 修一 (ふるさわ しゅういち)  
大学院生物圏科学研究科  
教育担当副研究科長・教授

私の研究分野での専門は比較免疫学だが、教育分野では、全ての生命が持つ防御戦略を専門として学生さん達に紹介し、その魅力やこの分野の将来の可能性を考えて貰っている。フィヒテとフンボルト曰く、高等教育では学問を絶えず研究されつつあるものとして扱うところにその特色をもつとある。そう言う意味では、大学人は第一線の研究を続けていなくてはならない。また彼ら曰く、学問を学ぶ究極の目的は決して単なる知識ではなく、むしろ知識を駆使する技法にあると。この概念にあっては、専門教育や教養教育の区別はない。あるとすれば、学生の主たる興味領域と、それを俯瞰する領域である。高度な専門領域に進む学生、またそうでない学生にも、俯瞰的な立場で物事を考え、応用力をもって行動できる卒業生として世に送り出したいものである。



吉田 光演 (よしだ みつのおぶ)  
大学院総合科学研究科教授

大学院総合科学研究科にプロジェクト型教育を進めるため設置された21世紀科学研究プロジェクトの委員会活動を契機に、大学院教育・カリキュラムに関わるようになり、その勢いで平成19~21年度の大学院教育改革支援プログラム「文理融合型リサーチマネージャー養成プログラム」が採択され、代表になってしまいました。専門は言語学ですが、大学院GPを通して大学院教育のあり方、プロジェクト型教育(PBL)、文理融合の方法などについて関心を抱くようになりました。このたび高教研センターというユニークな研究機関の学内研究員という機会を与えていただいたことを光栄に感じています。学士課程教育もそうですが、大学院教育は急激な転換期を迎えています。こうした問題を中心に今後勉強していきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願ひします。

## 修了生



井上 雅晴 (いのうえ まさはる)  
博士課程前期修了 (2010年3月)

私は、広島大学職員を対象とした大学院修学研修制度により、広島大学大学院教育学研究科高等教育開発専攻で学ばせていただきました。この2年間は、センターの先生方、職員の方々、研究室の皆さん、センターにお越し頂いた皆様など、様々な方々と出会い、ご指導とご協力をいただいたおかげで大変有意義なものとなりました。今後は大学職員として学んだことを活かしていきたいと思ひます。また、センターの関係者の方々とは、引き続き色々な形で関わらせて頂くことになると思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。



田中 佑典 (たなか ゆうすけ)  
博士課程前期修了 (2010年3月)

過日、パリ・セヌ河中洲に建つノートルダム寺院を訪れた際、これまで経験したことのない程の感覚に捉われた。聖なる時空たゆたうその場の中で、キルケゴールの表現を借りるなら「宗教的実存」を自覚する者として私は独り、神と向き合っていた気がした。河を隔てたセヌ左岸のパリ大学が中世の神学研究から発展して今日に至っている事も考え併せると、大学は「聖なるもの」の存在を下支えする役割を担う場でもあり続けたといえよう。この2年間、自分なりに学問のもつ聖性の一端を追い求めたつもりだが、それが形になっていたとは言い難い。しかしそうした思索の場を与えて下さったセンターすべての関係者の皆様に心から感謝致します。今までありがとうございました。



橋本 規孝 (はしもと のりたか)  
博士課程前期終了 (2010年3月)

修了までの2年間、先生方を中心として、院生や事務局といった皆様方には多方面において本当にお世話になり、誠にあ

りがとうございました。

大学職員として在職しながらの院生生活は、想像よりもはるかに過酷でしたが、過酷さよりも楽しさや良い刺激を実感する日々でした。そして、自身が職業上関係する高等教育というものを再認識したり、業務とは違った観点を知ったりする非常に良い契機でした。

博士課程前期を修了したあとも、この貴重な機会 で得られた問題意識への取り組みを継続し、得られた経験を活かすチャンスを模索してゆきたいと考えています。京都・大阪へお越しの際にはぜひお声がけいただき、また刺激に満ちたお話をさせていただきます。

## 新 入 生



川越 明日香 (かわごえ あすか)  
博士課程後期入学 (2009年4月)

長崎大学大学院教育学研究科の修士課程を修了し、当大学院の博士課程後期に入学をしてから早いもので1年が過ぎようとしています。これまでは学士課程で教員養成、修士課程で教育心理学を専攻してきました。そのため、入学当初は見聞きすることの多くが新しいことばかりで不安も多くありましたが、先生方、事務の方、先輩方に支えていただき、少しずつ歩むことのできた1年でした。この恵まれた環境の中でこれまでの教育学、心理学で学んできた知識を活かし、高等教育研究に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくごお願い申し上げます。



川崎 博宣 (かわさき ひろのぶ)  
博士課程前期入学 (2009年4月)

私は、学部が経済学部だったため、今年から高等教育を本格的に学び始めました。そんな私にとって、センターの先生方の様々な視点から丁寧にご教授いただき、高等教育についての広い知見を得ることができたことは、とてもありがたいことでした。また、授業以外でも、センターの先生方、職員の皆さま、先輩や同期の方々から支援と刺激を受けながら、有意義に

学習を進めることができました。修士の残りの1年は、これまでの学習を活かし、研究に励んでいきたいと思っておりますので、よろしくご願ひ致します。



小竹 雅子 (こたけ まさこ)  
博士課程前期入学 (2009年4月)

入学してから1年間、日々の授業準備や仕事に追われて、時間がすごい勢いで過ぎ去っていきました。それでも1年間をなんとか乗り切ることができて本当によかったと思います。

1年間を振り返ると、今まで気づいていなかった自分のダメなところに気付かされることが多々ありました。もしも大学院に入学していなければ気付くことはなかったであろう自分に気付くことが出来、自分にとって本当に大切な経験をしているんだなあと感じます。

次の1年間は、今まで知らなかった新しい事実を発見したり、今まで出来なかったことが出来るようになったりすること、その一つ一つをもっと楽しみたいと思います。何よりもまず自分が楽しむことを大切に、出来るだけ多くのことを吸収していきたいです。



土井 雅順 (どい まさのぶ)  
博士課程前期入学 (2009年4月)

私は現在、私立短期大学に事務職員として勤務しています。社会人としての日常業務と大学院生としての生活が果たして両立可能なのかと、常に不安を抱えながらの毎日でしたが、先生や院生の方々には授業の開講時間や開講形態などで多大な協力をいただき、何とか挫折せず無事に1年を乗り切ることができました。大変感謝しております。

本センターに入学してからの1年間は、とにかくレポートに追われる毎日でした。しかし、これを経験することによって高等教育に対する見方と知識が、(私なりにですが)以前よりも格段に深まったように思います。

まだまだ未熟者ではありますが、皆様方から、なお一層のご指導を賜ることができれば、幸甚に存じます。



西村 君平 (にしむら くんぺい)  
博士課程前期入学 (2009年4月)

早いもので、広島大学高等教育研究開発センターにお世話になって1年になります。この1年間、指導教員の島先生をはじめ、先生方や職員の皆様、院生の皆様のご助力のもとで、大変充実した毎日を送らせていただいております。

来年度は修士論文の締め切りがあり、大学院生活の一つ目の佳境を迎えます。まだまだ未熟者であり、皆様にご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今年度学んだことを十分に生かし、論文執筆に全力を尽くす所存です。これからもよろしくお願ひします。



馬 東曲 (ば とうきょく)  
博士課程前期入学 (2009年4月)

中国の洛陽から来た留学生の馬東曲と申します。研究テーマは日中両国の大学カリキュラムの比較です。

高等教育研究開発センターに来てからあつという間に、1年になりました。振り返ってみると、最初はレジュメさえ書けなくて、泣きたいほど困りました。幸せなことに、いつも先生と先輩達がいろいろと教えてくださったり、助けてくださったりしています。そのおかげで、自分が進歩し、成長してきました。4月に修士2年生になります。これからの1年間も、修士論文を目指し、研究に一生懸命頑張り、また大切に楽しんで過ごそうと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

※原田健太郎さんも2009年4月、博士課程後期に入学されました。

## 外国人研究生



呉 書雅 (ご しょが)  
(2009年4月)

指導教員の黄先生のおかげで、優れた教員の方々や教育研究設備を誇る RIHE に来られ、大変感謝しております。生活面のみならず、学業面でも RIHE の皆様にサポート

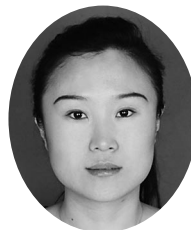
して頂き、ここに来られてよかったと思ひております。研究生としての1年間、研究方法や高等教育の専門的内容について、いろいろ勉強になり、充実した時間を楽しく過ごして参りました。このように恵まれた環境のなかで、研究にもっと力を入れ、研究者を目指そうという気持ちが強くなっております。

今年は、先生方や先輩方の御指導のおかげで、博士課程後期に進学に至ることができました。これから、日本と台湾における高等教育の力になれるように頑張りたいと思ひます。今後ともよろしくお願ひ致します。



徐 曉劍 (じょ ぎょうけん)  
(2009年10月)

研究生として高等教育開発専攻で学び研究するという機会を得てから、はや半年が経とうとしています。この短い半年で、学生から研究者という転身を果たした。来日から今まで、充実した時間を過ごしてまいりました。センターの先生方を中心とした関係者の皆様にお世話になりました。これからは、自身の研究活動を深めて、マスターの2年間も大切に過ごしていきたいと考えております。今後の生活で、勉強と研究はもちろん、日本文化と社会の広い体験も目指します。皆様のご支援をよろしくお願ひ申し上げます。



石 敏 (せき びん)  
(2009年10月)

はじめまして。中国の大連から来ました。

RIHEの教職員と学生の皆様はとても優しい方々ばかりです。先生方の学問に対する真面目な精神を尊敬しています。事務室の方々は親切で、院生の方々は勤勉だと思ひます。また、ここでは豊富な資料を手にとることができるため、研究の環境はとても良いです。

私は RIHE で研究ができることをとても嬉しく思ひています。その間、一番重要なことは博士号を取得することです。また、同時に日本の文化に触れ、多くの日本人と交流を深めたいと思ひます。どうぞ皆様これからもよろしくお願ひいたします。

## センター滞在記



### Professionally, An Opportunity of a Lifetime; Personally, A Dream Come True

**Rayburn Barton**

(Professor, University of South Carolina, Beaufort, USA)

As I reflect upon my time as a Visiting Professor at RIHE, I have to say that it has been both professionally and personally one of the best experiences of my life. I began teaching at the university level in 1978, and from 1985 to 2007. I was a higher education administrator either at the campus or system level. During all that time, with the exception of a six-week period spent at the Harvard Institute of Educational Management during the summer of 1986, I have never taken an extended time like the time spent at RIHE to concentrate exclusively on scholarly research and reading. These activities have always been pursued as my administrative work permitted. Needless to say, the three months spent at RIHE have been most worthwhile from a professional standpoint.

I have found the RIHE Library a treasure trove, with a large English collection on the most salient issues in contemporary higher education as well as historic volumes not only on higher education but also numerous topics of interest on Japanese culture, education, history, and religion, to name but a few. As far as professional activities while here, I completed one article and most of a second, which depends for completion upon receipt the results of a fifty-state survey in the United States. I delivered four lectures, two at RIHE, and one each at Tohoku and Doshisha Universities.

The time at RIHE has also permitted me the opportunity to pursue one of my personal passions, further study of Japanese gardens and culture. With the exception of two or three, I have every weekend travelled somewhere in Japan to visit gardens: Okayama, Koyasan, Kyoto, Kanazawa, Mito, and Tokyo. I also visited Beppu, Nagasaki, Miyajima, Matsushima, Kurashiki, and Fujimi. I have also had time to read several books on Japanese culture, politics, and religion while I have been here. I had deep admiration and appreciation of Japan and her people and culture based upon study and two previous trips to Japan, but the RIHE experience has permitted me the opportunity to increase my admiration by gaining a more detailed knowledge of Japan. One of America's most beloved Presidents was John F. Kennedy. Once in a speech in Berlin, he referred to the spirit and character of Berliners by saying, "Ich bin ein Berliner." If I may be permitted to borrow a phrase, I think after spending three wonderful months in residence at RIHE and travelling in Japan, I know what is meant by the phrase: "Watashi wa Nihonjin desu."

Where do I begin to say thank you for this once-in-a-lifetime opportunity? First, to Prof. Shinichi Yamamoto and Prof. Hideto Fukudome for the invitation to spend time at RIHE. I am especially thankful for all that Prof. Fukudome has done for me since I have been here. He is a wonderful colleague and friend. Second, to all the faculty of RIHE, and especially to Professors Kazunori Shima and Jun Oba for introducing me to their families and spending so much personal time sharing with me various aspects of Japanese cuisine and culture. Third, to all the faculty, including Professors Satoshi Watanabe and Yumiko Hada, who shared wonderful conversation with me over lunch at various time during my stay. Finally, to the wonderful RIHE staff and librarians, thank you one and all, and especially Ms. Masayo Daikoku, the wonderful lady who put sweets in my mailbox, and Ms. Hiroko Araki. I cannot say enough to express my gratitude for all the things, both large and small, they did to make my every day here a rewarding and personally pleasant experience. Heartfelt thanks to all of you.

(バートン先生は平成21年4月～7月まで広島大学外国人研究員としてセンターに滞在されました。)



## Statement at the end of period of Visiting Professorship

**Simon Marginson**

(Professor, University of Melbourne, Australia)

For the non-Japanese intellectual the encounter with modern Japan, traditional Japan and Japanese scholarship in a high quality university context are all enthralling. The four month stay in Hiroshima University has been a major event in my life and there is a sense in which the visit never ends. A hunger is created that cannot be fully satisfied, because full immersion in a culture needs fluency in language and a shared history. But the RIHE visiting professor program enables a much deeper international experience than normally available to us.

So I am deeply grateful to everyone at RIHE; and especially thankful to Yamamoto Shinichi who invited and hosted me with kindness; to Huang Futao, who is such a thoughtful and admirable colleague; to Araki Hiroko who was essential from beginning to end and brilliantly solved every problem my stay presented; and to Oba Jun and Li Min who offered time and friendship that made it a better human experience. I missed my wife Melba and daughter Ana Rosa while in Higashi-Hiroshima (though fortunately Ana Rosa was able to visit for ten days during the holiday break) and it was wonderful to spend evenings with Jun and Yumiko and their lively daughters Manon and Mia. My French has improved as a result of my contact with the Oba family though it must be stated that my Japanese is still negligible. Remarkably, life in Saijo is so well organized and predictable that one can function without much local speech.

In some respects I used the time at RIHE from July to October 2009 in a similar way to Professor Nian C. Liu from Shanghai Jiao Tong University. It was wonderful to be without local Australian meetings and telephone calls (I left my mobile phone back home), though email kept me engaged all over the world as usual. I took the opportunity to change down my routine. I slept more and spent time getting healthy. I walked to and from the RIHE office most days, almost 10 kms, lost weight and now feel much better. There is beautiful country on the Boulevard and it is good to be close to nature and the seasons, to our Neolithic selves, which are nearer in Japan than other places. It satisfies something deep. I have never seen the April cherry over the Kansai or red November maples in Eikan-do. But I have felt the green humid summer and the cool autumn in Higashi-Hiroshima and for now that must be enough.

During the stay I visited Kyoto four times and spent 15 days in its shrines and temples. Kyoto is one of the very greatest cultural treasures on the face of the Earth. I am proud to say that my 13 year old daughter was as closely engaged as I was. The effect on her will be lifelong. Like Professor Liu, I also read widely outside the field of higher education studies while working at RIHE, in areas of personal interest — Earth history (paleo-climatology, evolution) and the effects of climate change on human development, cultural and political change in Ancient Rome, and modern world history; and then found that it was not a waste of time because it could all be used in current writings on globalization, the knowledge economy and creativity. I am currently doing a comparison between the two great pre-industrial modernizations, the Tokugawa remaking of Japan at the beginning of the Edo period, and the reforms of Augustus in Rome. Both took a long tradition and remade it as the centre-piece of reform. This kind of relationship between tradition and modernity; the kind of relationship embodied in the university as a social form, but not in the whole of modern society; remains potent today.

While I was at RIHE I took the opportunity to advance on an ambitious book writing program, completing a major work for Cambridge University Press on International Student Security; preparing the whole of a second book on Ideas for Intercultural Education; starting three chapters for the jointly written Imagination; and sending back the proofs for Global Creation. Another dozen or so chapters, articles and seminar and conference papers made this a productive time. I spoke at the Kyoto Consortium of Universities, Kumamoto University, Hijiyama University and Waseda University and maintained active cooperation with our colleagues at Tohoku University. The opportunity to thoroughly read the work of Japanese scholars, especially the English-language work of my colleagues at RIHE, was particularly valuable and I now have a much better appreciation of the outstanding range and depth of higher education studies in this country. The field is as strong here as anywhere. Those who participated in my seminars will not be surprised to see me add the point that in my opinion the field in Japan is too nation-centred and insufficiently global in its agenda; but exactly the same point can be made about higher education studies in all countries, including my own.

(マージンソン先生は平成21年7月～10月まで広島大学外国人研究員としてセンターに滞在されました。)